南修平著
『アメリカを創る男たち
――ニューヨーク建設労働者の生活世界と「愛国主義」』

（名古屋大学出版会、2015 年）

佐　藤　千　登　勢

はじめに

本書は、巨大都市として成長を続けるニューヨークで、建設業に従事した人々の労働と生活を、社会史的な観点から考察した歴史研究である。考察の対象とされている時代は、主に第二次世界大戦から1980年代後半までであるが、著者の関心は現代の労働をめぐる諸問題にもつながっており、そうした意味においてたいへん意欲的な著作となっている。

ニューヨーク市は、1950年代から60年代にかけて建設ブームに沸き、国連事務局ビル、リンカン・センター、世界貿易センタービルといったアメリカ人のみならず世界中の誰もが知っているような建築物が相次いで作られた。そうした現場で日々、汗水流しながら建設作業を担ったのは、ニューヨーク建設労組という強大な労働組合に組織された白人男性の熟練工であった。建設労組は18の職種別組合から成り、ピークを迎えた1960年代末には22万5,000人の構成員を有しており、その数はニューヨークの組織労働者の5分の1を占めていた。

建設労組は長年、ニューヨーク市中央労組会議の議長を輩出するなど、同地の労働運動において中心的な役割を果たしてきたことから、先行研究では労働運動史の枠組みで考察されることが多かった。著者は、こうした先行研究を踏まえながらも、これまでほとんど着目されてこなかった建設労組のメンバーの労働と生活に目を向け、彼らの意識や価値観を明らかにしようと試みている。本書で用いられている資史料は多岐にわたるが、なかでも、ニューヨークの建設労働者を対象にしたライフヒストリーの聞き取り調査や、組合の幹部やニューヨーク建設業協会の議長らへのインタビュー資料が多用されており、著者は、建設労働者の生の声に耳を傾けながら、彼らの日常生活を実証的かつ具体的に描き出している。

1970年5月のハードハット暴動に象徴されるように、建設労働者は労働階級の白人男性のなかでも、政治的に保守的な人々として認識されてきた。しかし、そうした保守性がどこから来るのかという点については、これまで解明されてこなかった。建設労働者が「狭隘な世界」に住んでいるのだとすれば、彼らがいかなる労働に従事し、どのような生活を営んでいるのか、その実態に目を向けた上で、彼らの政治的な発言や行動を理解しなければならないというのが、著者の問題意識である。

本書で繰り返し論じられているのは、建設労働者の意識や価値観を理解するには、人々の間を分け隔てる「境界」がどのように作られ、機能しているのか、また政治や社会経済的な要因によって、それがいかに変化していくのかを考察することが不可欠であるという

点である。この「境界」は、建設労働者同士の関係や雇い主との関係にとどまらない。彼らを取りまく政府や資本といった大きな権力との関係によっても、「境界」は作り出されている。著者の言葉を借りると、労働とは「社会的関係が創られ、発展・変化する主要な起点のひとつ」(3) であり、日常生活の中で作り出される「当為としての秩序」に目を向けることによって建設労働者が社会や組織の一員であること、さらにはアメリカ人であることをどのように意識してきたのかを理解することができるという。こうした視座を持つことは、圧倒的に白人男性が多かった建設労働者が、アメリカという国家へ包摂されていくメカニズムを解明する可能性を切り拓く。

1. 建設労働の特殊性と「境界」

本書を通読して評者が感心したのは、建設労働の特殊性を論じた部分であり、著者がかかげる問い、すなわち人々の間を分け隔てる「境界」がどのように作られ、機能しているのかを検討するにあたって、建設労働が非常に適した事例だという点である。通常、歴史研究において白人男性労働者といえば、製造業に従事する工場労働者を対象にすることが多い。製造業の労働者は、特定の職場で働き、ライン化された作業に従事している。それに対し、本書に登場する建設労働者は、現場を転々とする不安定な雇用を常態とし、現場では少人数でチームを組みながら作業にあたる。作業は機械化が難しく、技術革新の影響を受けにくいため、見習い制度を通じて習得される熟練と経験が長い間、大きな意味を持ってきた。

建設労働者が、厳しい位階制の中に位置づけられ、組合員の間には厳格な上下関係があったことも、本書の随所で鮮やかに描かれている。採用には縁故がものをいい、父子関係やエスニシティが重視された。また、危険な現場でともに働くことで、熟練工としての誇りと絆が生まれ、「男らしい」仕事をこなす俺たちという意識を持ち、ジェンダー化された価値観を身につけ内面化してきた。

さらに、建設労働者が公権力や資本とどのような関係を結んできたかという問題を明らかにする際にも、建設業の特殊性は活きている。建設業界は、1930年代のニューディールに始まった公共事業の拡大を、雇用確保の好機とし、戦前戦後を通じて、公共事業を行う連邦政府、州政府、地方自治体と密接な関係を築いてきた。建設業は一定期間の契約で成り立っているため、労働者にとって雇用を絶え間なく確保することは死活問題であり、建設労組の指導部がリーダーシップを発揮するには、州知事や市長らと太いパイプをもち、十分な雇用を提供できる状態を維持しなければならなかった。

さらに、公共事業ではなく民間企業から請け負う事業の場合も、小規模な建設業者と熟練労働者の間に築かれてきた濃密な人間関係に基づいて雇用が提供され、地域で独自に締結・運用された協定で労働条件が決められていた。ニューヨーク市では職域紛争解決のために、「ニューヨーク・プラン」という調停・仲裁制度が労使間で作成された。労組は、見習いの育成において主導権を握り、人材を独占的にプールしており、有能な熟練工を提供できることを、よりよい雇用条件を獲得するための交渉力として行使したという。

このように、白人男性が圧倒的多数を占める熟練労働者が、建設労組を軸にいかなる

「境界」を生み出し、公権力や資本との関係の中で、どのように彼らの労働や生活が守られてきたのかという大きなテーマについて、著者は説得力のある議論を展開しており、非常に多くのことを学ぶことができる。

次に、評者が本書を読んで感じた疑問や感想を、いくつか述べてみたい。

2. コミュニティと宗教について

まず、第3章で著者は、建設労働者のコミュニティに目を向け、彼ら特有の価値観やアイデンティティの形成との関連を論じている。第2章の最後で、フリーマンの先行研究について言及されており、建設労働者の場合、職住の「境界」が明確であり、労働現場での紛争がコミュニティに持ち込まれることはないという指摘が紹介されている。ここで、フリーマンが言っているコミュニティは、地域社会、共同体であり、建設労働者の生活の「場」を意味している。一方、本書の第3章で取り上げられている事柄は、労災の補償、年金制度と投資信託など、労組が組合員のために導入したいわゆる福利厚生であり、それらが、「家族やコミュニティの生活に深く染み入っていくようになった」(103) ことや、組合が主催するさまざまな行事に多くの建設労働者とその家族が参加したこと、大学へ進学する子弟を対象にした奨学金制度が組合によって設立されたことなどが述べられている。たしかに、こうした事例から、建設労働者が大黒柱として働いて家族を養い、学歴はないながらも、ミドル・クラスの生活を営んでいることへの気概や自負を持つようになったことは理解できるが、ここでの叙述からは、建設労働者のコミュニティの具体的なイメージはつかみにくい。

この章の後半部分では、1950年代から1960年代にかけてクイーンズに建設されたエレクチェスターの事例が論じられており、「境界」が明確に存在し、そこでの人間関係を通じて同質性が培われる「場」としてのコミュニティの事例が提示されている。エレクチェスターの住民の大多数は、ローカル3のメンバーであり、住宅のほかにショッピングセンターやスポーツクラブなどがある独立した町を形成していた。そこでは、主婦である「電気工の妻」を対象とした学習セミナーや文化サークルが開かれ、ヴォランティア活動や子供向けのイベントが盛んに行なわれていたという。

ただ、この事例からも、稼ぎ手である夫・父を中心とした近代的な核家族がコミュニティの基本的な単位となっていたことはわかるが、彼らのコミュニティが実際どのようなものであったのか、いささか説明に物足りなさを感じた。

建設労働者のカトリック信仰について論じている第4章は、評者にとってたいへん興味深い章であり、ここから多くのことを学んだ。カトリックの信仰が労働者の意識にどれほど浸透し、彼らの価値観がいかに形成されているのかという問題は非常に重要である。著者によると、建設労働者にはイタリア系やアイルランド系の比率が高く、カトリック教会での宗教教育を通じて独特の秩序意識が培われていたという。ここでは、イエズス会が運営するカトリック労働学校が働く人々のために夜間クラスを開き、受講の条件を労働組合員であることとしていたことや、1936年にザビエル労働学校がマンハッタンのチェルシーで開校され、それ以降、ニューヨークの他の場所にも開設されたことなどが論じられてい

る。

労働学校では、あなたがたと同じようにキリストも汗水流して働く労働者であった、仕事は天職であり、信仰と誠実な労働生活の実践により、神の国に近づくことができるといった教えが説かれた。著者によると、こうした価値観がカトリックの教えに基づいて労働者に植えつけられ、労働者同士や労使の関係において、実利的なものだけではなく「精神世界」を含む、深い絆が築かれたという。また、労働学校での教えは、労働現場において「反宗教勢力」として共産主義者を排除することも目指していたという指摘も、たいへん興味深い。

ただ、建設労働者のカトリック信仰について論じるのであれば、労働学校や教区学校だけではなく、ミサへの参加など教会との日常的な関係やコミュニティにおける教会の役割などについても触れる必要があるのではないかと思われる。また、同時代のカトリック信者の中には、社会正義を求めるラディカルな労働運動を展開した人々もおり、カトリックの信仰が必ずしも労働者の保守性につながっていったとは言えないのではないか。

3. 階級、世代、人種、ジェンダーについて

本書では、主要なテーマのひとつとして、熟練工と非熟練工の区分が明確であることが繰り返し論じられている。非熟練工は、熟練工の秩序から完全に排除され、位階制の下位に位置づけられてきた。現場では使い捨てにされ、建設労組に属する熟練を持つ白人男性労働者から「他者」として認識されてきた。白人男性の非熟練工であれば、マイノリティや女性のように地位を上昇させる機会にも恵まれず、より条件が悪く不安定な雇用に甘んじるほかなかった。

このように、建設業において熟練の有無は、「白人男性の労働階級」の非同質性を示す重要な要因であり、それによって明確な「境界」が作り出されていたことが本書では論じられているが、非熟練工に関する説明があまり多くはなく、どのような人々であったのかイメージがつかみにくいという印象を受けた。また、熟練工にも多様な職種があるが、職種間に何らかの優劣や序列はなかったのだろうか。

さらに、白人男性建設労働者の非同質性という観点から、世代の違いについても、もう少し議論が展開されてもよいのではないかと感じた。本書は考察の対象としている時期がかなり長く、必ずしも時系列に従って書き進められているわけではないため、世代が異なる建設労働者の語りが出てくる。だが、戦後のベビーブーム世代の者と戦前生まれの親世代の意識や価値観の違いについては詳述されていない。先述のように、父から息子へ仕事が継承され、組合も採用に際して縁故者を優遇してきたという点は本書の重要な論点である。しかしその一方で、アメリカ社会では、第二次世界大戦後、労働階級の子弟のホワイトカラー化が進んだとされている。建設業という職業に対する世代間の見解の違いや葛藤などは、どれほど見られたのだろうか。建設労働者である親が、組合が支給する大学進学のための奨学金を獲得した息子や娘を誇りに思っていたという記述があるので、建設労働者の家庭でも高学歴化とホワイトカラー化が進んでいたと推察されるが、どうなのだろうか。

建設業に従事する熟練工は、圧倒的多数が白人男性によって占められ、公民権運動が高揚するまでは、労組によって名目的に少数の黒人が雇用されるだけであったという。公共事業の受注に際して、黒人の雇用を増やすように行政から圧力を受けるようになると、建設労組は強く反発した。本書の第6章では、こうした攻防が、生き生きと描写されており、公民権運動の違った側面を知ることができる。

評者にとってたいへん印象的だったのは、建設業において人種とジェンダーが複雑に交錯していたことである。すなわち、黒人をはじめとするマイノリティの男性は、建設現場に常に存在していたが、あくまでも非熟練工としてであり、熟練工である白人男性から疎外されてきたのに対し、女性は完璧な「他者」であり「想定外」の存在だった。黒人男性よりも、女性の建設現場への参入は、はるかに衝撃的な出来事であった。

第7章の表によると、1990年代の初めでも建設労組における女性の比率はわずか数%程度であったようだが、女性をある程度受け入れている職種とそうではない職種がある。それらは、作業内容や熟練度、現場の環境などにおいて、いかなる違いがあったのだろうか。また、女性の採用に関する考え方は、職種で異なったのだろうか。女性の採用をめぐって、組合内部で戦わされた議論などがわかると、そうした点がさらに解明されたのではないかと思われる。

さらに、マイノリティの女性の雇用については、「女性」というくくりだけで論じるのは難しいように思われる。統一女性熟練工との関連で、女性電気工にも高学歴でフェミニズムの影響を受けた女性と経済的な理由から建設労働に従事するようになった女性がおり、「階級の問題」があったと述べられている。おそらく前者は主に白人の女性であり、後者はマイノリティの女性が多いのではないかと推察されるが、黒人女性やヒスパニック系の女性など、人種とジェンダーの双方においてそれまで建設労働から排除されてきた人々の雇用について、もう少し詳しく論じることができれば、さらにこの部分の考察が深まったのではないかと感じた。

おわりに

本書は2016年度のアメリカ学会清水博賞の受賞作である。近年、働く人々の仕事や生活のありように正面から真摯に取り組んだ労働史の著作は日本ではもとよりアメリカでも多くはなく、本書のような力作は今後、何年にもわたって、この分野の代表的な研究成果として多くの読者に読まれていくことであろう。

本書を読んで評者は、著者の次のような言葉に最も共感を覚えた。すなわち、白人男性建設労働者の考察を通して、「境界」の歴史性を問い、それによって新たな関係構築を展望していくてがかりをわれわれは得ることができる。日常の中で「異なる者」が作り出される根拠を探り、その仕組みを見れば、われわれは人と人の関係を結びなおす契機を考えることができるという終章の箇所である。今日、組織率が危機的なレベルまで低下しつつある中で、労組は、かつては排除の対象としてきたマイノリティや女性の労働者を必死に組織化しようとしているが、そうした努力を組合は「多様化」という言葉で語っている。しかし、そうした中にあっても、建設現場で働くプエルトリコ系のシングルマザーと男性

の同僚のやりとりに見られるように、ともに働く者への共感が「異なる者」を結びつける可能性をひらくという展望は、厳しさを増す労働環境の下で日々苦闘する私たちの心に深く響く。

著者は、建設労働者の生活を保守しようとする姿勢は必ずしも政治的保守主義に通じるわけではなく、それはラディカルな反権力として表出することもあれば、ハードハット暴動のように、ニクソン政権の戦略に呼応して政治的保守主義として表出し、公権力に自ら包摂されていく場合もあったと論じている。生活上の保守性と政治的な保守主義は明確に区別して考えられなければならないと著者は考えているが、生活上の保守性、すなわち「守るべきもの」を守るという意識は、建設労働者をとりまく「境界」が大きく変わった21世紀にも受け継がれているのだろうか。終章で描かれている、2001年の9.11テロの直後、ブッシュ大統領を取り囲み、熱狂的に支持を表明した建設労働者の姿、さらにはトランプ大統領の誕生に熱狂する「白人労働者」の姿にその答えを見い出すことができる。